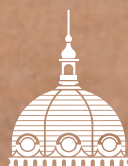




令和3年8月4日発行 通巻218号

Newsletter of the Kanagawa Prefectural
Museum of Cultural History

神奈川県立歴史博物館



AUG. 2021 Vol.27 だより No.2

交叉する文化と権力
ー特別展
「開基500年記念 早雲寺ー戦国大名北条氏の遺産と系譜ー」
によせてー 2

収集のすすめ
ーコレクション展「運動のすすめ」の開催にあたってー 6

THE けんぱく PUNCH
博物館の名脇役
ミュージアム・ショップと喫茶ともしび 8

早雲寺展の視座―寺宝にみる「文化」と「権力」

箱根湯本にある早雲寺は、伊勢宗瑞（北条早雲）【図 1】を開基とし、大永元（1521）年に戦国大名北条氏の二代当主氏綱が建立したとされる古刹です。早雲寺の開山には京都大徳寺の以天宗清が招聘され、大徳寺関東龍泉派の一大拠点として、かつ京都文化の受け入れ窓口として東国社会で文化的な影響力を持つことになりました。また同寺は、小田原を拠点に関東に覇を唱えた戦国大名北条氏の菩提寺としても栄華を極め、北条歴代当主たちから篤い庇護を受けるとともに、教団の規模拡大と寺院組織を成熟させていきました。早雲寺は、今もなお北条氏ゆかりの多くの宝物を遺し、かつての偉容を偲ばせます。

令和 3（2021）年は早雲寺の開基 500 周年にあたる年です。当館ではこれを記念して、関わりの深い寺院や北条氏一族が今日まで大切に伝えてきた数々の宝物を一举に公開する特別展「開基 500 年記念 早雲寺―戦国大名北条氏の遺産と系譜―」を開催いたします。ただし、早雲寺の展覧会であるからといって、いわゆる後北条氏展や戦国時代展といった内容ではありません。早雲寺の寺宝群を主役に置いた場合、彼らの歴史は戦国時代にとどまらない豊かな内容を含んでいるのです。本展では寺宝たちの履歴に耳を傾け、その歴史を繙いていくことに注力し、早雲寺とその寺宝が今日に至るまで形成された歴史的過程をとらえることを目指します。

さて、本稿では上記の展示趣旨のもとで開催される特別展「早雲寺」のみどころについて、お伝えしたいと思います。早雲寺の文化や寺宝には、箱根神社といった既存の東国霊場や、室町期以来の東国における伝統権威である関東公方足利氏が影響を及ぼします。戦国期には小田原北条氏・京都大徳寺による創建と庇護を受け、戦災後の江戸期には狭山藩北条氏や玉縄北条氏や早雲寺末寺による復興がされています。早雲寺の寺宝群に着目すると、そこには「文化」と「権力」が複雑に絡み合いながら歴史を紡いできたことに気づかされるのです。文化と権力が歴史的にどのように関わり合いながら展開し、早雲寺の寺宝形成に収斂していくのか。ここでは、その道程を展覧会開催に先立ってほんの少しだけご紹介しましょう。



【図 1】 重要文化財 北条早雲像 早雲寺

模倣による正当性―中世東国社会の秩序

そもそもなぜ、戦国大名北条氏の菩提寺早雲寺は箱根湯本の地に開かれたのでしょうか。箱根の地は、箱根三所権現を中心に鎌倉幕府や鎌倉府などの歴代武家権力によって信仰されてきた霊場でありました。関東に覇を唱えた戦国大名北条氏も、東国武家権力の信仰に倣い箱根神社へ深く帰依しており、伊勢宗瑞の末子伊勢菊寿丸（のちの北条幻庵）が箱根権現別当に就任し、歴代当主による社領保障などを積極的に実施していました。東国の在来権力ではなかった北条氏にとって、相模地域へ進出した当時、東国には伝統的権威として君臨する関東公方足利氏（室町幕府將軍足利氏の一門）や関東管領上杉氏などの勢力が蟠踞しており、既存の宗教的・政治的秩序に入り込みながら権力基盤を確立することは喫緊の課題でもあったのです。二代当主氏綱期に、「伊勢」から「北条」へ改姓を果たし、代々相模守に就いた鎌倉幕府執権北条氏の名跡を継承し、権威付けを図ったことは極めて象徴的な出来事でしょう。早雲寺が既存の東国霊場である箱根の地に開かれたのは必然だったのです。

戦国時代、関東公方足利氏の周辺には、豊かな文化圏が作り上げられていました。それは、政変の結果、ながらく武家の都として栄えた都市鎌倉から公方が離れ古河へ動座した後も活発でした。玉隠英瑛らの鎌倉

五山僧の文化人や画僧賢江祥啓など、鎌倉との交流を通じた文化サロンを形成していたことが知られ、その様子は京都から招かれた関東画壇絵師たちが手掛けた絵画資料の存在からも裏付けられます。例えば、天文7（1538）年に描かれた詩軸画の「雪嶺斎図」【図2】は、古河公方足利晴氏の題辞「雪嶺斎」と花押が据えられ、建長寺僧らの題賛が並び、画僧賢江祥啓の系譜を引く僊可が山水図を描きます。古河公方周辺の優れた文化圏の存在を示す優品と言えます。関東へ進出を果たした北条氏も、軍事的基盤の伸長だけではなく、かかる足利氏の文化圏を吸収しかつ継承しながら寺宝の形成を果たしていきます。早雲寺には、「機婦図（狩野派筆）」【図3】や「達磨図（式部輝忠筆）」など、関東画壇絵師の作品が伝わっています。政治史に加え、文化史の視座から戦国期東国史をとらえてみることで、美術品の作成・所持を通じた権力のあり様も垣間見えるのです。

文化規範の創出—戦国大名北条氏権力のバロメーター

開山以天宗清が招請されて以来、早雲寺には大室宗碩・明叟宗普・梅隱宗香など彼の法脈を継ぐ寺僧たちが集い、寺院運営がされていきます。教団も膨れ上がり、本光寺・栖徳寺・宝泉寺など、早雲寺の末寺や



▲【図2】 重要美術品 雪嶺斎図 僊可筆 五島美術館（撮影：名鏡 勝朗）



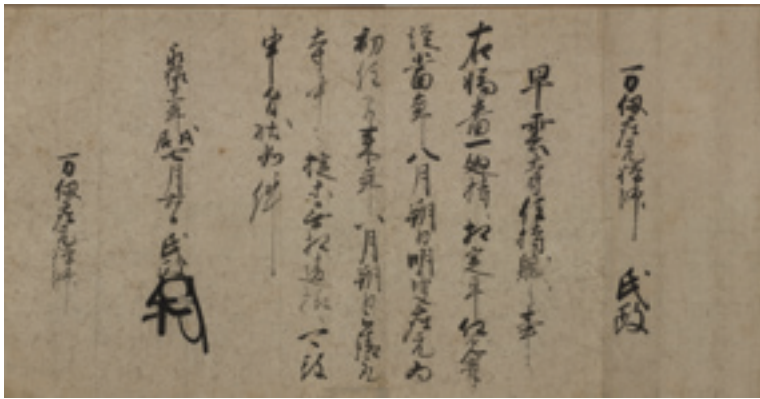
▲▶【図3】 神奈川県指定重要文化財 機婦図 狩野派筆 早雲寺

塔頭も箱根や小田原に幾つも建立されます。早雲寺では輪番制の採用による組織的な成熟もみられ、同寺を拠点とする関東龍泉派は大きな成長を遂げていきます【図4】。北条氏も早雲寺の経営を支援するとともに、大徳寺住持への出世を果たす早雲寺住持たちを厚遇します。また彼らを通じて、京都文化を摂取していくことも期待していたと考えられます。京都大徳寺と早雲寺を往来する彼ら歴代住持の存在が、北条氏の政治支配や文化に果たした役割のほどが知られます。

二代当主氏綱によって定められた北条氏の本拠地小田原には、京都から絵師や仏師・鍛冶師などの職能民が集い、東国一の小田原文化が形作られていました。当初、北条氏は既存の室町期的秩序である関東公方足利氏と関東管領上杉氏を中核とする政治体制をなぞらえつつ、京都文化の権威をまといながら東国社会における支配の正当性を確立してきました。それは文化を模倣する際の姿勢にも如実にあらわれています。「小田原鉢」と称される兜鉢類では、「鉄黒漆塗四十八間筋兜鉢」【図5】にみられるように、形姿は京都風の阿古陀形風の豪奢な装いとしつつ、その制作技法は関東筋兜に倣った鉄板の矧ぎ合わせを施しています。京都風の完全なる模倣でない部分に、文化を受容する側の北条氏の姿勢や態度が垣間見えており、興味深い資料です。

北条氏が軍事的・政治的に既存の秩序を超え始める





【図4】 箱根町指定重要文化財 北条氏政判物 早雲寺



【図5】 鉄黒漆塗四十八間筋兜鉢 当館

と、自身で文化規範を創出するようになっていきます。儀礼や宴会で使用される土製品の「かわらけ」は、東国では伝統的にロクロで成形されていましたが、北条氏は京都の成形技法である手づくねで成形されたかわらけを用いるようになります【図6】。こうした京都風の権威をまとった手づくねかわらけは小田原で生産され、次第に八王子城や鉢形城、元佐倉城・葛西城など北条氏領国内やその周縁で広範に流通するようになり、模倣品も登場します。京都文化を受容していた北条氏が、やがてその京都風であることを自己の文化のアイデンティティとし、文化の発信源へと変貌を遂げていることになるのです。こうした文化規範（コード）を小田原は生み出していったのです。

復興と由緒—近世権力の思惑—

戦国大名北条氏の栄華とともにあった早雲寺は、豊臣秀吉による小田原攻めの結果、灰燼に帰してしまいます。しかしながら、同寺中興の祖である菊徑宗存をはじめ、琢玄宗璋・説叟宗演の歴代住持たち、そして北条氏の系譜をひく近世狭山藩北条氏や玉縄北条氏たちの助力によって、早雲寺は再建され、寺宝など今に伝わる文化財が作られ寄進されます。寺宝のなかにある玉縄北条氏によって制作された「北条五代歴代画像」（早雲寺所蔵）や、境内の狭山藩北条氏により建立された北条五代墓石はこうした文化財復興の成果と言え



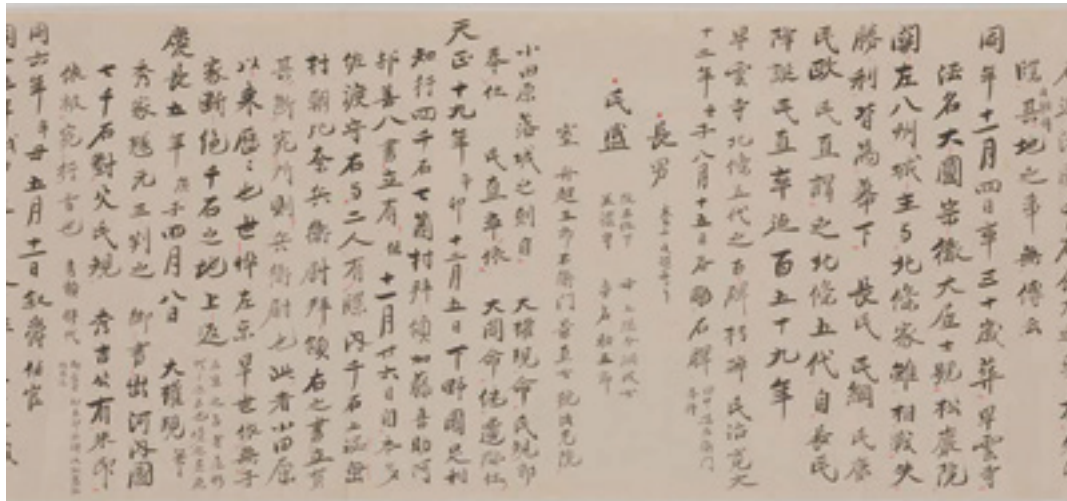
【図6】 手づくねかわらけ 小田原市教育委員会

ましよう。

近世早雲寺の文化財復興に、とりわけ大きな役割を果たしたのは狭山藩北条氏でした【図7】。その支援は四代藩主氏治から認められるようになり、五代藩主氏朝へと継承されていきます。とくに氏朝の貢献は多大であり、その援助は資金援助に加え文化財の寄附など多岐にわたりました。ではなぜ、彼らはここまでの援助を早雲寺に対して行ったのでしょうか。そこには、狭山藩主職を養子として継職したという、氏治・氏朝が抱える事情があったと考えられます。とくに氏朝の時期には、家譜編纂事業が盛んに行われるようになり【図8】、狭山藩北条氏の血統を、北条五代の直系として位置づけるなどの作為も施されます（実際、初代藩主の氏盛は北条氏の傍系であり、後に五代当主氏直の養子になっています）。ゆえに、北条氏の直系たる狭山藩主が（あくまでも狭山藩側の認識ですが）、先祖



【図7】 三鱗紋陣羽織 当館



【図8】 北条氏朝家譜 個人

の事蹟たるかつての菩提寺早雲寺を復興することを通じて、養子として継職した自己の正当性を喧伝するとともに、アイデンティティーの確立のために利用したのです。「由緒の時代」とも評される近世社会のなかで、狭山藩、とりわけ藩主氏朝は、戦国大名北条氏の直系であるという系譜認識を生み出し、そうした認識を担保する存在として早雲寺は極めて重要な意義を有したのです。同藩が文化財復興事業に乗り出すのは歴史の必然でもあったのです。

今日、われわれが滅亡した戦国大名北条氏と早雲寺の足跡を様々な資料から追うことができるのは、こうした近世北条氏たちの尽力に拠るところが大きく、なかでも狭山藩北条氏が果たした役割は多大です。しかし、その背景には近世権力による思惑が濃厚に作用していたことも、また事実なのです。

文化は権力を可視化する

私たちの眼前にひろがる様々な歴史資料たち。その背後にある、時代を超えた人々による不断的な努力を、われわれが意識することは極めて稀でしょう。早雲寺の寺宝群も、戦乱や火災による亡失や散逸、そして流転を経ながらも伝世しています。それは、早雲寺やその末寺・塔頭、北条氏の末裔たちによる、文化財をまもり、伝えてきた努力の賜でもあります。しかし、寺宝それぞれの歴史を繙くならば、その事情は複雑であり、とりわけ戦国大名北条氏や狭山藩北条氏といった政治権力による意向が大きく作用していたことがうかがい知れます。個々の寺宝は、当該期の文化を語り、そして政治権力の性質までも語りうるのです。文化は権力を可視化する装置であると言えます。そうした文化と権力が今日に至るまで交叉しながら、早雲寺の寺宝群は形作られてきたのです。

さて、これまで述べてきた文化と権力をめぐる密接な関わりは、果たして現代のわれわれと遠く時を隔てた出来事なののでしょうか。今では日本の代表的文化とされるアニメも、かつては例外ではありませんでした。太平洋戦争中の日本で制作された国策映画『桃太郎海の神兵』は、当時の技術・表現の粋を集めた日本初の長編アニメーションであり、手塚治虫や東映動画・スタジオジブリへ連なる戦後日本アニメの原点とも称される作品です。その内容は、日本の戦争や植民地支配を正当化するプロパガンダ映画の性格を持ち、軍部の指示のもとで制作されており、こうした映画・アニメは「文化兵器」と位置付けられていました。「平和の祭典」であるオリンピックも、1936年のベルリン開催ではナチスによるプロパガンダとしてスポーツ文化が政治利用された事例として著名です。これらの出来事はたかだか80年ほど前に起こったことです。

現代にあふれる多様な文化は、権力と無関係であることなどでできず、権力なき牧歌的な文化などこの現代には存在しないといっても過言ではないでしょう。文化と権力の交叉は、現代的にして、かつわれわれにとって極めて卑近な問題なのです。

(わたなべ ひろき・学芸員)

特別展 開基500年記念 早雲寺

—戦国大名北条氏の遺産と系譜—

会期：2021年10月16日(土)～12月5日(日)

休館日：毎週月曜日

会期中に作品・資料の展示替を行います。

収集のすすめ ―コレクション展「運動のすすめ」の開催にあたって―

武田 周一郎

博物館の土台

博物館の活動は、多くの土台によって支えられています。なかでも最も基礎的なもののひとつが、資料の収集です。博物館では、集めた資料について調べ、その成果を展覧会等の場で広く紹介します。面白いことに、展覧会を開催すると関連して新たな資料や情報が集まります。このサイクルがうまく繋がると、博物館の活動はより豊かになっていきます。そして、博物館の活動を支えるサイクルを循環させるには、多くの人たちのご協力が不可欠です。博物館は、そのような力に支えられた絶え間ない資料収集の実践によって形作られているといえます。

当館は、前身である神奈川県立博物館の頃から、実に多種多様な資料を集めてきました。昭和 42(1967)年に開館した県立博物館は、人文系部門と自然系部門からなる総合博物館であり、歴史の展示で扱う最も新しい時代は主として開港期でした。よって、資料収集の対象は幕末から明治期までを下限とし、それ以降の時代の資料については積極的に集められていませんでした。その後、人文系と自然系の再編整備を契機として現代史部門が設置され、関東大震災から高度経済成長期までを対象にする方針が定められました。しかし、この時代の資料は収蔵されていなかったため、ゼロから集める必要がありました。

1964 年の東京オリンピック・パラリンピック

当時、収集されたものの一群に、オリンピックに関する資料があります。古くは昭和 3(1928)年のアムステルダム大会から昭和 47(1972)年の札幌大会に至るまで、メダルやポスター、記念切手などで構成されたバラエティ豊かな資料群であり、そのうち大きな割合を占めるのが昭和 39(1964)年の東京大会に関するものです。同大会は、高度経済成長期を象徴する一大イベントであり、神奈川県でも 4つの競技が開催されました。すなわち、カヌー(相模湖)、サッカー(三ツ沢競技場)、バレーボール(横浜文化体育館)、ヨット(江ノ島)であり、関連して相模湖と大磯に選手村分村が設置されました。このように、神奈川県と縁の深かった同大会は、常設展示のテーマとして取り上げるため資料を重点的に収集する必要があったのです。収集された資料は常設展示室の一角を飾り、広く紹介

されました。一方で、同じ年に開催されたパラリンピックでは、脊髄損傷者の療養施設である箱根療養所(国立病院機構箱根療養所)の選手が活躍しましたが、同大会の資料は収集されませんでした。オリンピックに比べると入手が難しかったと想像されます。

県立歴史博物館が平成 7(1995)年に開館してからは、市民の方から東京大会に関する資料をご寄贈いただくようになりました。そのうちのひとつが、競技役員のブレザー【図 1】です。東京大会のブレザーといえは選手が着用した赤いものがよく知られています。ご寄贈いただいたブレザーの色は目にも鮮やかな青であり、陸上競技の競技役員を務めた方が着用したものでした。大会で活躍したのは選手だけでなく、多くの人たちによって支えられていたことを物語る資料といえるでしょう。

後に、このブレザーをはじめとする資料を一同に展示する機会がありました。平成 26(2014)年に開催された特別陳列「よみがえる東京オリンピック」です。東京大会の開催 50 年を記念して企画した同展では、これまで当館が収集してきたオリンピックに関する資料を紹介しました。その際に注目したのが、聖火リレーです。昭和 39 年の聖火リレーでは神奈川県内に設けられた 2つのコースを、県内だけで総勢約 2,000 人のランナーが駆け抜けました。また、沿道に集まった観客は約 133 万人にも及んでいます。よって、聖火リレーは、競技を直接その目で見た人よりも大勢の人たちに強い印象を残したように思われます。この展



【図 1】 競技役員のブレザー



【図2】聖火ランナー記念バッジ
バッジなどがあります【図2】。

資料を集め、調べ、展示で紹介すると、新たな資料の収集に繋がる。まさに、本稿の冒頭でお示したサイクルです。幸いにして私は、現代史担当の前任学芸員とともにこの展覧会に携わり、実践の現場に巡り合いました。そして、多くの方の力によって成り立つサイクルを、より強力に回していきたいと考えました。

1998 年のかながわゆめ・国体 ゆめ大会

資料収集の実践という観点から、もう一つの資料群を紹介しましょう。それは、平成 10（1998）年のかながわ・ゆめ国体、ゆめ大会に関するものです。かながわ・ゆめ国体（第 53 回国民体育大会）は、昭和 30（1955）年の第 10 回大会以来、43 年ぶりに神奈川県で開催された国体でした。大会は、9 月の夏季大会と 10 月の秋季大会によって構成され、続く 11 月には、かながわ・ゆめ大会（第 34 回全国身体障害者スポーツ大会）が開催されました。一連の大会では開催年を「国体イヤー」と位置付け、年間を通じて、ウォーキング大会をはじめとして誰でも参加できるスポーツイベントが実施されました。大会を一過性の祭典ではなく、21 世紀に向けた生涯スポーツ推進の契機にしようと企図したためです。その結果、5 月の開幕祭から 11 月の閉幕祭までに県内各地で多彩なイベントが開かれ、40 万人を超える参加者が集まりました。

閉幕後、これらの大会に関する資料群は、実行委員会から当館へ移管されました。オリンピックの聖火リレーにあたる「炬火^{きよか}リレー」のトーチやランプなどを含む資料群は、当館に収蔵される資料のうち最も新しい時代のもです。先述した前任学芸員は、資料の収集にあたりこの大会を神奈川県にとって 20 世紀最後の一大イベントと位置づけるとともに、常設展示の下限を高度経済成長期から将来的に 20 世紀末まで拡大する方針を立てました。現代社会において際限なく生み出される資料から何を残し、どのような意味を見出そうとするのか。その実践には難しい判断が伴い、過

去から現在、未来を見渡す幅広い視野が不可欠です。時代は 20 世紀から 21 世紀、そして平成から令和に移り変わりました。未来を見据えた前任者の想いは新たなサイクルの原動力です。

実践に向けて

ところで、福澤諭吉は、その著書である『学問のすすめ』で次のように語っています。

抑も人ノ勇力ハ唯読書ノミニ由テ得ベキモノニ非ズ読書ハ学問ノ術ナリ学問ハ事ヲナスノ術ナリ実地ニ接シテ事ニ慣ルハニ非ザレバ決シテ勇力ヲ生ズ可ラス我社中既ニ其術ヲ得タル者ハ貧苦ヲ忍ビ艱難ヲ冒シテ其所得ノ知見ヲ文明ノ事実ニ施サ、ル可ラス

端的に言えば、人間の勇力（優れた力）は読書だけから得られるのではなく、実践によって培われるという意味です。私は、この言葉と前任者の背中に導かれて、新たなサイクルの一步としてコレクション展「運動のすすめ—20 世紀神奈川のスポーツイベント—」を企画しました。この展覧会では、本稿で取り上げた大会に関する館蔵資料を一堂に展示し、あわせて東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会について紹介します。本展を契機に次の循環へ結びつけるには多くの力が必要です。また、収集した資料を未来へ伝えるには収蔵スペースの拡充が不可欠です。課題は多いですが、実践あるのみ。ぜひご期待ください。

（ただ しゅういちろう・学芸員）

参考文献

- ・寺寄弘康「博物館の現代資料と資料情報の共有化について」『神奈川県立博物館だより』138 号（Vol.27 No.3）1994 年
- ・寺寄弘康・武田周一郎「特別陳列『よみがえる東京オリンピック』によせて」『神奈川県立歴史博物館だより』196 号（Vol.20 No.1）2014 年
- ・福澤諭吉『学問ノススメ 五編』1874 年

コレクション展 運動のすすめ

—20 世紀神奈川のスポーツイベント—

会期：2021 年 6 月 26 日（土）～9 月 12 日（日）
休館日：毎週月曜日（ただし 8 月 9 日（月・祝）は開館）
6 月 29 日、7 月 6 日、13 日、8 月 31 日（火）



博物館の名脇役～ミュージアム・ショップと喫茶ともしび



最近では書籍で特集が組まれるなど、博物館の附帯施設であるショップやカフェは、館を特徴付ける大事な要素となっています。歴史博物館のミュージアム・ショップと喫茶ともしびも、とても魅力的な場所です。丁度展示を見終わった営業部長のパンチの守と一緒に、その魅力を探りに行きましょう。

パンチの守（以下パ）：いやー、今回の展示も面白かったのう。ショップで図録をチェックせねばならんな。おっ、この作品の絵葉書、欲しいと思っていたんじゃ！

ショップスタッフ（以下S）：部長お目が高い。他にも色々なグッズをご用意していますよ。

パ：む、それは財布の紐がゆるゆるになるのう…。

S：特別展図録や所蔵品モチーフのオリジナルグッズ以外にも、こういったものもありますよ。

パ：おお、横浜が発祥と言われているナポリタンじゃな！こちらは近代横浜で貿易が盛んだったシルクを使ったお菓子とな。横浜らしいお土産も豊富じゃのう。

S：ちなみに、こちらのコーナーでは神奈川県歴史や文化をテーマにした書籍も取り扱っていますので、特別展や常設展を見た後に購入して、そのまま喫茶で読書、なんていう方もいらっしゃるんですよ。

パ：それは余さず博物館を楽しんでくれている感じがして、よい使い方じゃなあ。

S：ぜひパンチ部長も何かお手に取っていただいて、喫茶へ行ってみてはいかがでしょうか。

パ：商売上手じゃのう…ではこれを買って、喫茶ともしびへ行ってみようかの！

喫茶ともしびスタッフ（以下喫）：パンチ部長いらっしゃいませ。お好きな席へどうぞ。

パ：ここはいつ来ても落ち着くのう。お、きちんとアクリルパネルが設置してあるな。窓も開けてあって換気もばっちりじゃ。確かこの部屋、元々は横浜正金銀行の書記課の部屋があったのじゃったかな。

喫：そうです、窓枠にその名残が感じられますよね。

パ：うむ、この雰囲気もいいのう。今日のランチはさっきショップで見かけたから懐かしのナポリタン（790円）にするとして、デザートは何がオススメじゃな？

喫：健啖家ですね部長。デザートでしたら、クリームあんみつ（緑茶付、690円）はいかがでしょうか。箸休めに昆布の胡麻和えもついていますよ。

パ：腹ペコのワターシに素晴らしい提案じゃ！ではショップで買った本でも読みながら、待とうかの。

喫：食欲がますますわいてきそうな本ですね…。

博物館に来る機会には、ぜひミュージアム・ショップと喫茶ともしびにも足を運んでみてくださいね！

（市野 悦子 / いちの えつこ・非常勤学芸員）

